編輯を了りて

□

春雨がそぼ〳〵と灑いで追懷にいゝ宵です。然し私はそうしたく無い。非才不肖、無爲に一歳の任期を漫過した私にとつては、甘く麗しかるべき追懷も徒らに汚辱と悔恨の連環を手繰る心苦しい苛責に他かなら無いから。

□

兎に角三冊の雜誌は發行したので形式的には私も責務を免れたわけだが、龍南文壇を冒瀆した私の罪は不燼の焰となつていつ迄も私自身を炮烙の刑に苦める事でせう。

□

今更愚痴を零しても始まら無いやうですから一切の罪を甘受して新しい天地に突き進んで見ませう恐らく其處でも自己不滿の種を蒔く事でせうけれど、不滿から不滿へと移り行くのも進化だと思ひます。悲愴な進化も男らしくて宜い。

□

では是でお別れします。（三、一八。緑郎）